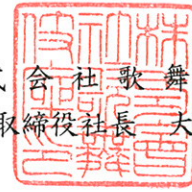


平成21年11月10日

社団法人 日本建築学会
会長 佐藤 滋 殿

株式会社 歌舞伎座
代表取締役社長 大谷信義



歌舞伎座の建替計画について

謹啓

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、劇場歌舞伎座は、ご承知のように明治期以来、わが国固有の古典芸能「歌舞伎」の専用劇場として、幾たびの建替や改修を繰り返しながら長きにわたりその役割を果たして参りました。現在の歌舞伎座は、大正13年に建築された第3期の建物が第二次世界大戦時の空襲で甚だしく損傷を受け、戦後これを改修した第4期の建物であり、創建後85年、改修後59年を経過し、建物の老朽化や劇場設備の陳腐化が著しく、抜本的な機能更新が喫緊の課題となっております。

平成18年4月、貴学会からも「歌舞伎座の保存に関する要望書」をいただき、弊社といたしましても保存改修および伝統的意匠の継承の可能性について様々な検討を行ってまいりましたが、耐震性能や防災性能といった安全性、戦時中の空襲によって大規模な火災を経験した現躯体を使用し続けることの問題、また、バリアフリーや、特に観劇視線、舞台機構、劇場附帯施設の不足など様々な問題を解決する必要がございました。これらの検討を踏まえ、数々の問題を解決するためには保存改修では困難であるとの判断に至り、貴会からもご要望いただきました伝統的意匠を継承する方向で建物を全面的に建て替えることとさせていただきます。また、民間企業が「歌舞伎」を事業として維持していくためには、現建物の保存改修では収支の面からも全く成り立ち難く、この点も十分検証の上、判断要素とさせていただきます。

新しい歌舞伎座の計画では、背後の高層部を大きくセットバックさせることによって歌舞伎座の独立性を確保し、長年親しまれてきた景観の継承を図りたいと考えております。さらに、現歌舞伎座の当初設計者である岡田信一郎氏と、戦後改修設計を行った吉田五十八氏という、二人の建築家の優れた伝統的意匠が見られる外観や内部空間を継承すると共に、部材の再利用もできる限り取り入れ、現歌舞伎座の文化的・歴史的意義を尊重した計画としております。また、新劇場は、より充実した歌舞伎専用劇場を目指し、世界に向けた「歌舞伎」文化の創造・発信をおこなう複合拠点として生まれ変わると同時に、緑豊かな都市空間の創造、環境負荷低減への取り組みや都市基盤の整備等も図ってまいります。

何卒、このような事情にご理解いただきますとともに、今後とも歌舞伎座再生の取り組みにご理解とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

謹白